ひかるどろだんごのつくりかた

特定非営利活動法人S-pace運営
神戸市立六甲道児童館　館長　金坂尚人

① 土さがし

●どんな土がいいのかな

グラウンドや公園の土で右の写真のように、雨が降ったあと表面上に細かい質のものが固まったような場所のものが良いと思います（写真①）。水をかけてシャバシャバにしても、手で握ると指の形が残る程度の粘性が必要です（写真②）。

※砂が多いと崩れます、粘土質が多いと握っても手からあふれ出てしまいます。場所によって粘土質と砂の配合が違うので言葉では伝えれません。実際にいろんな土でやってみてチャレンジしてください。

（C）KANESAKA/S-pace

① 土さがし（番外編）

●他から土を準備する

なかなか良い土台の土が見つからない。学校（園）の土が使えない。そんな時には事前に準備をしておくというのも一つの方法です。今回準備したのは

①**浄水発生土**（水道水を作る過程で出た沈殿土・浄水場で1トンで１００円程度で購入可能。）
（ホームセンターで『荒木田土』を購入して代用しても良い）
②**砂（ホームセンターで購入可能）**

これを基本　　**浄水発生土（1.5）：水（1）：砂（3）**

の割合で土台の土として配合しました。

※浄水発生土の水分保有率がまちまちので
　あくまで目安です。実際に調整してください。
※浄水発生土は多くの場合浄化処理のため
　活性炭を入れており黒い場合があります。
　その場合服などにつくと汚れが落ちない場合
　があります。
※田んぼの土と砂を配合してもいいと思います。
　その際ゴミをできるだけ取りましょう。

（C）KANESAKA/S-pace

② 土台づくり

●ギュッギュッギュ！

ぎゅっと丸めて水分を絞り出す。これを繰り返します（写真①）まるくころころころころ

　裏技として新聞紙に包んで、余分な水分を吸い取ってもいいでしょう（写真②）

※でっかいゴミや髪の毛などはここでとっておきましょう。出来るだけ丸く整えておきましょう。

（C）KANESAKA/S-pace

③秘技•富士山くずし

●普通の砂で団子の上に砂山を作ってなでる

土台を作った際と同じ砂（土）でベースとなる球体を作ります。
片手に土台を持って砂をかけます。すると玉の上にミニ富士山ができます（①）。そのまま傾げて、余分な砂を自然に落とし、（②）反対の手の親指の付け根でそっと撫でます（③）。軽く握る。くりかえし・くりかえし。
※この富士山崩しで自然の真球を目指しましょう。
撫でる強さはすこ～～～～しづつ強くしていきます。
※ここで細かすぎる砂をかけると表面が急激に乾燥しひび割れが大きく再起不能になります。
※ここでの多少のヒビワレは、丸めてギュッギュッで回復します。

(C) KANESAKA/S-pace

④ひとやすみ・ひとやすみ

●まん丸になったら、おひるね

少しづつ少しづつかけ砂を細かくしていくのが良いでしょう。（ふるいにかけて数種類に分けておくのも良い）
写真①くらいのまん丸になったらお昼寝タイムです。ビニール袋に入れてクルクルしましょう②　最低でも15分位眠りたい。

※お昼寝するときはちゃんとベット（柔らかい場所）で寝かせてあげてください。
（下が砂だとするとせっかく出来た皮膜に傷が付いたり跡が付いたりします）③
※中の水分がゆっくり表面に浸透してきますので、水分が完全に無くならない限り作業は可能です。２週間後でも。

（C）KANESAKA/S-pace

⑤さら砂(粉)をゲットしろ!

●さら砂（粉）を集める

さら砂は、さらさら・ふわふわした煙みたいになる砂（粉？）大きなつぶが入ってなくて手で押すと、手の形がくっきり残る。（①）

※さら砂の作り方（準備物・ほうき＆チリトリ）
２～３日雨が降ってなくて乾いたグラウンドなどをほうきではいて、下の土台を出そう。そこをほうきで擦れば細かいさら砂ができる。（②）

※さら砂はこんなところにある
・道路/公園/グラウンドの隅（排水の最後）（③）　・玄関マットの下等

※さら砂の色で団子の色が決まります。

(C) KANESAKA/S-pace

⑥さら砂かけ→なでなで

●富士山くずしをさら砂で

光るポイントになるさら砂が集まったら、それで富士山くずしをします。
おやすみして少しウェットになった表面にさら砂の膜を作っていく感じ

※なでている感じは③でやった時よりも少しだけ強い。

さら砂かけて①→余分な砂落として②→反対の手で撫でて③→ころがして少し位置ずらす
・・・繰り返し

※団子の構造④
- 水色土台（凸凹している）
- 茶色（普通の砂かけて丸みを整える）
- オレンジ（さら砂をかけて光る表皮をつくる）

④

(C) KANESAKA/S-pace

⑦その時は突然に…

●袋をひっくりかえそう

ずっとさら砂をかけてこすっていると、その下にピカピカ光る元の表皮があるとき突然見えてくる。
撫でる手の親指の付け根は写真①のようになっている。
ここからは、ゆっくり水分が内部から出てくるので、水分が出たら、さら砂をかけて、しばらく磨きおやすみしての繰り返し。
さっき取り出した袋には水分が付着しているので、裏返して使おう。②
　　だんごも子ども達も急には光りません。
じっくり時間をかけて、手をかけて育てていきましょう。

（C）KANESAKA/S-pace

⑧Danger(泥団子の天敵)

●下地づくり

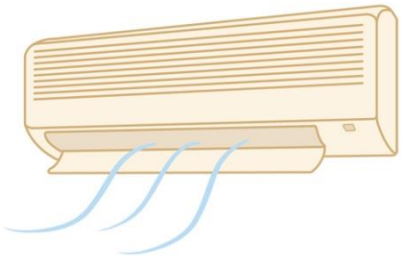
・・・砂に混じったゴミ・葉っぱ・髪の毛等
（葉っぱなどのゴミ・髪の毛を皮膜が出来たあと引っ張って泣いた人がいます。…私です）

●サラ砂かけ

・・・サラ砂にまじったでかい砂。指輪
（さら砂かけで指輪があたって何度涙した人がいたでしょう…私です）

●全般

・・・急激な乾燥（日光・急に細かい砂をかける等）衝撃
（ほんの少しの休憩のつもりで、日差しが強い場においておくと、急激な乾燥が起き１分でもひび割れし何度涙した人がいたでしょう…私です）



◎手洗いもしっかりしよう！！

（C）KANESAKA/S-pace

⑨手粉かけ

●さら砂に手を突っ込んで磨く

さら砂に手を突っ込んで、手に粉を付けておく。（手粉）
（その際に手に砂の粒が付いていると、団子に傷がつくので注意、付けたあとに一度手を握って開くと良い）

手についたか、付いていないかわからない程度の状態で団子を磨く手に付けるを繰り返す。
（それほど粒子が細かいものがついている）

※写真①は袋から取り出した状態。１週間放置したものでほんの少し表面が湿っている

※写真②は手粉で少し磨いたもので、布磨きを施す前。

（C）KANESAKA/S-pace

⑩布磨き

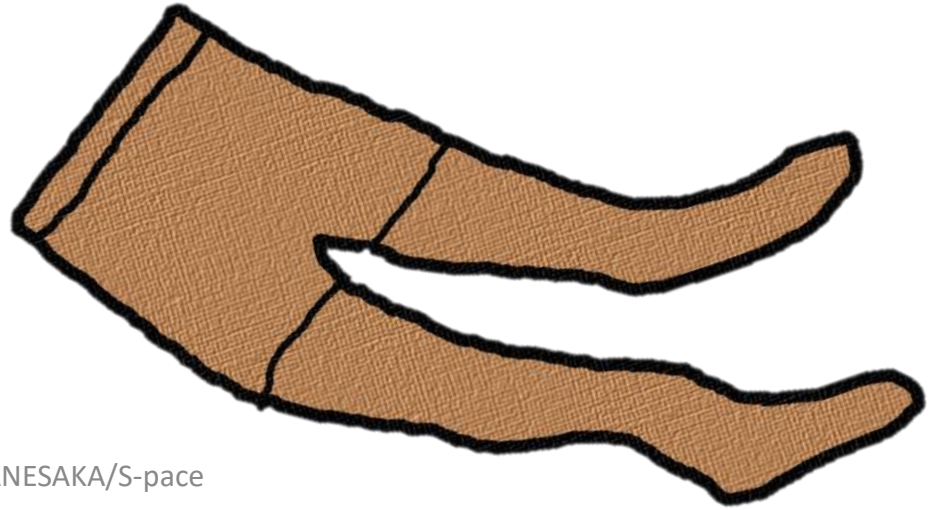
●ストッキング…ください

団子の仕上げの磨きを施す布ですが、適しているものは、
ストッキング・ジャージ・ジーンズ生地が良いでしょう。

それぞれの下に柔らかいタオルやお肉をあてて、磨きましょう。

その際に磨く強さは様子を見ながら調整してください

※最初は直線的に磨き、最後は円を描くように磨くとよかったです。



（C）KANESAKA/S-pace

⑪光った!!

- 「みてみて空の青がうつってる！」
  「恐竜の卵みたい」

（C）KANESAKA/S-pace

⑫保存する

●オリジナルケースを作ろう

団子はとても衝撃に弱く、ちょっとしたことで表面が崩れてしまいます。その時のショックは計り知れません。
幼稚園や保育園でも牛乳パックなどで団子ケースを作って保存する場所を決めている場合が多いです。
ケースにタオルや、新聞紙をさいたものを入れて自分だけのオリジナルケースを作りましょう。①②

①

②

③はみんなで作った泥団子用のお座布団。
見せ方も関わる大人のテクニックです。
それにより、ほかの子どもたちの導入にもなるでしょう。
（完全に水分が抜けて、袋から取り出しても汗をかかなく、光が失われてなかったら永久保存玉です。）

③

（C）KANESAKA/S-pace

まとめ•工作と作業の違い

●「不便を楽しむ」ということ

　スーパー竹とんぼで有名な故・秋岡芳夫先生は、同じことをただ繰り返すことは『作業』であり、それに工夫が加わることで工夫がある作業『工作』になると言われています。

　幼稚園や保育園の現場の多くで「光る泥だんご」が行われ、４歳児などでもじっくり取り組み光らせています。「泥だんご」製作の目的は、光ることだけではありません。自分でどの土が適しているか、ベースになる土を探し求めて子どもたちはいろんなところに水を掛けに行きます。Aちゃんがそっと木の陰に隠しておいた団子はいつの間にか誰かに潰されていました。ずっと頑張っていたBちゃんはあと少しで光ったのに、ちょっとしたことで皮膜に傷が付いてしまいました。すごいさら砂を見つけたCちゃんに、みんなが「どこにあるの？」と聞いてもCちゃんは「自分で探せ」といって教えてくれませんでした。

大切なことは光らせることよりも、その過程の中で起きる様々な事件です。作業はしんどいことかもしれませんが、それに「工夫」を加えると工作にかわります。最初からすべて準備するのではなく、全てが整って無い状態であっても、自分たちでどのように工夫できるかの入口を作ることが私たちの仕事ではないでしょうか。自分で土を見つけた！まんまる！光った！そこまで頑張った！すごく硬い！ほらいっぱい認める点はありますよ。

（C）KANESAKA/S-pace